論　文

キルギス共和国チュー川流域出土の唐風石造仏教彫刻

森　　美智代※

※　東京藝術大学社会連携センター

はじめに
Ⅰ．出土地点
Ⅱ．各作例の概要と考察
——三尊龕（スラヴ大学附属博物館所蔵）を中心に
Ⅲ．制作地
Ⅳ．砕葉鎮における石造仏教彫刻制作の意義
おわりに

はじめに

かつての砕葉（スイヤブ）城すなわちアク・ベシム遺跡を中心とするキルギス共和国・チュー川流域は、鉄門以北の西トルキスタンでは唯一本格的な仏教寺院址が確認されている地域であり、仏教文化圏の飛び地の様相を呈する。アク・ベシム遺跡とその周辺で発見された仏教美術作品の数量は決して多くないが、内容は極めて多彩で、ガンダーラ、カシミール、トハリスタン、タリム盆地、中国中原等、様々な地域からの影響が認められ、シルクロード史上に砕葉が占めるユニークな地位を反映するかの如くである。その一つ一つの作例が砕葉研究において貴重な造形史料であることは言うまでもないが、何分小品や断片が多く、十分に議論されていない状況である。

ところで現在進行中の帝京大学文化財研究所によるアク・ベシム遺跡発掘調査では、第２シャフリスタンで唐砕葉鎮時代に属すると推定される遺構が検出され、唐朝の砕葉における活動が明らかにされつつある。この状況を受けて筆者に与えられた課題は、チュー川流域で出土した仏教美術作品について美術史学的考察を行い、唐の仏教文化が波及した様相を明らかにすることであった。そのために本稿では漢文題記を伴い（ただし判読できる字は僅かであるが）、保存状態が良好な石造三尊龕（スラヴ大学附属博物館所蔵）に重点を置き、唐代中原の有紀年銘作例と比較して、制作年代と背景を考察する。また三尊龕の類例や関連する石造仏教彫刻についても取り上げ、チュー川流域でこれらの石彫が制作された意義について考えたい。なお、本稿は学際的・国際的な調査研究プロジェクトの一環として様々な分野間の交流を企図しており、仏教美術史研究者には不要の説明も含まれることをご諒解いただきたい。

Ⅰ．出土地点

現地調査は、2018年８月27日～８月31日に実施した。その際、実見し得た作例を別表（表１）にまとめた[1]。

一連の作例の出土・発見地点は、アク・ベシム（＝スイヤブ、唐・砕葉鎮）、クラスナヤ・レーチカ（＝ナヴェカト、唐･新城）、ブラナ（＝ベラサグン）の三箇所の都城遺跡に分散している。ただし、正式な発掘調査による出土は1939～40年にベルンシュタムが発掘したアク・ベシム第０寺院（AKB-0[2]、以下ベルンシュタム寺院と略称）のみで、これ以外は偶然発見されており、多くは発見の地点や状況等の詳細が不明であるという。遊離資料として扱うべきであろう。

なおチュー川流域において仏教寺院址は、アク・ベシム遺跡に三箇所[3]、クラスナヤ・レーチカ遺跡に三箇所確認されているが、その内ベルンシュタム寺院は唯一の中国式瓦葺建築である。チュー川流域を除く中央アジア地域の仏教文化圏——トハリスタンとタリム盆地——は乾燥地帯で石材に乏しく、仏教寺院は塑像・壁画（土壁）・日干し煉瓦から構成される土の造形物である。ベルンシュタム寺院以外のアク・ベシム遺跡とクラスナヤ・レーチカ遺跡の寺院址は日干し煉瓦建築で、祠堂のプランは内陣を一重か二重に回廊が取り囲む中央アジア式が多数を占める（岩井 2019）[4]。またアク・ベシム遺跡内での寺院の立地を見ると、第１・第２寺院址が第１シャフリスタン南壁外にあるのに対し、ベルンシュタム寺

表１.

分類	図版	作品タイトル	法量(cm) 高×幅×奥行	発見／出土地点	所蔵	備考
仏龕①	図 1	三尊龕	60×34×14.5 中尊残高19	クラスナヤ・レーチカ 第2仏教寺院附近	スラヴ大学 附属博物館	発見時期不明
②	図 2	五尊龕断片	65.5×43×13 中尊残高30	アク・ベシム	キルギス国立 歴史博物館	1987年発見
③	図 3	龕断片 （左脇侍）	13×16×11	アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』※ 図XXIII-3
④	図 4	龕断片 （獅子）	18.3×9.5×8	アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』 図XXIII-2
単独像①	図 5	着袈裟像断片 （2片）	上：72×50 下：78×54×23.5 台座高26	ブラナ近郊	ブラナ博物館	2000年頃発見
②	図 6	如来像 頭部断片	14×19×6	アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』 図XXIII-5
③	図 7	蓮華座断片 （2片）	8×18	アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』 図XXIV-4
不明	図 8	右手断片		アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』 図XXIII-4
小仏塔	図 9	仏塔上部	高10.7 一辺15×15	アク・ベシム ベルンシュタム寺院	キルギス国立 歴史博物館	『報告』 図XXIV-2

※『報告』はBernshtam1950（和訳：川崎・山内2020）を指す。

院は第２シャフリスタン内にある。第２シャフリスタンは、2017年の帝京大学による発掘調査により、唐朝が新造した砕葉城の遺構である蓋然性が高まった（山内・櫛原・望月 2018）。以上を踏まえて、ベルンシュタム寺院を杜環『経行記』に見える砕葉・大雲寺に当てる説が提起されている（川崎・山内2020）。ベルンシュタムによる発掘は寺域の一部に留まることから、今後の再発掘と議論の深化が期待される。

ともあれ、石造仏教彫刻の同時出土地点が唐朝官衙区に隣接するチュー川流域唯一の中国式建築寺院であることは、当地における石造仏教彫刻の制作が唐文化の波及と密接に関連することを窺わせよう。

Ⅱ.各作例の概要と考察――三尊龕（スラヴ大学附属博物館所蔵）を中心に

2-1. 三尊龕（図１）

＜概要＞

クラスナヤ・レーチカ第二寺院址附近で偶然発見されたといい、発見地点・時期とも不詳である。[5)]

円拱形をなす龕と基座から構成され、龕内に同根連枝の蓮華座上の仏菩薩三尊像を浮彫りする仏龕である。なお同根連枝蓮華座は唐代に愛好され、原則的には中尊を阿弥陀仏とするが、時として他の尊格にも転用されるため、図像のみから尊格を確定することはできない。全体に磨耗し、三尊とも面部が失われてはいるものの、チュー川流域出土の仏教石彫の中では随一の保存状態で、資料的価値が高い。小像ゆえに図像の省略が見られ、彫り残しや歪な箇所[6)]も一部に見受けられるが、手慣れた工人の作と見られる。以下のディスクリプションにおける左右の表記は、中尊から見ての方向である。

＜正面＞

龕は上下二段に分かれ、上段は同根連枝蓮華座上に一仏・二菩薩を表すが、三尊とも頭部が人為的に打ち欠かれている。それぞれ蓮弁形の頭光が線刻される。蓮華座の蓮茎は中央から左右に分岐し、側芽が下向きに発出して蕨手状を呈する。

中尊は右手を胸前に挙げる。印相は摩耗して判然としないが、施無畏印か。左手は膝上に伏せ置き、右足裏を見せて趺坐する。大衣を偏袒右肩につけ、僧祇支を腹前で衣中にたくしこむ。また右袒衫をつける。大衣と右袒衫の縁を二条の刻線であらわし、衣襞をほぼ等間隔に刻む。

両脇侍はいずれも右手を胸前に挙げる。左手は垂下して右脇侍では天衣をつまむように見え、左脇侍

は水瓶を執るようである（図 1-2）。また右脇侍はほぼ直立し、左脇侍はわずかに腰を捻る。天衣は両肩から互い違いに体前にまわり、長短のＵ字を描く。胸の下に括り線を彫り、腹部が突き出る。足首まで隠れる長さの裳をつけ、裾が二重に表わされる。

龕下段は、中央に球状・台付の器（香炉か）を置き、これを挟んで一対の獅子が向き合う。右の獅子は閉口して横を向き、尾を立てる。左の獅子は首を手前に向けて開口し、尾は判別できない[7]（図1-3）、彫り忘れであろうか。

基部中央に６文字×５行の漢文題記があり、意図的に損壊されているがなお「□年五月」等、数文字が判読できる（柿沼 2019：54-55）。

題記の左右に俗人供養者各２体を表す。左側は筒袖の衣をつけて跪坐する男性供養者（柄香炉を執るか）と侍者立像（下半分欠失）。右側は跪坐する女性供養者（合掌？）と侍女立像で、いずれも頭頂に小ぶりの髻を結う。

龕外に唐草文を線刻する。斜側面観のパルメット葉で、右巻・左巻を交互に配する。

＜側面（図 1-4）・上面（図 1-5）＞

基座両側面に四稜の対葉華文を線刻する。

龕両側面に神将形各１体を線刻する。いずれも龕正面側を向き、腰を右に振って邪鬼の上に立ち、左手に戟を執って右手は腰に置く。肩甲・胸甲・膝上丈の腰甲・膝当・脛当をつけ、沓を履く。冠が右側面は鳥翼冠、左側面は前立てのある冠で、また右像は口髭のみ、左像は口髭と顎髭を生やす等、左右で変化がつけられている。邪鬼は褌のみをつけた裸形である。右像は正面を向いて蹲踞し、左手は膝に置いて肘を張り、右掌で神将の左足を受け、頭で右足を受ける。左像は側面観で四つ這いになり、背中に神将形をのせる。

上面は線刻で内巻対勾と対葉華文のユニットを組み合わせた華文を表す。

図 1-1. 正面

図 1-2. 左脇侍

図 1-3.

図 1. 三尊龕

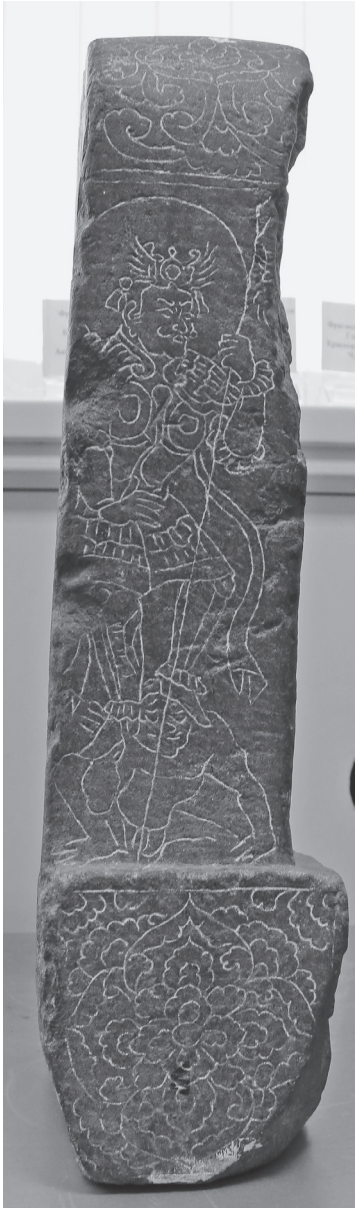


図 1-4. 側面（右）

図 1-4. 側面（左）

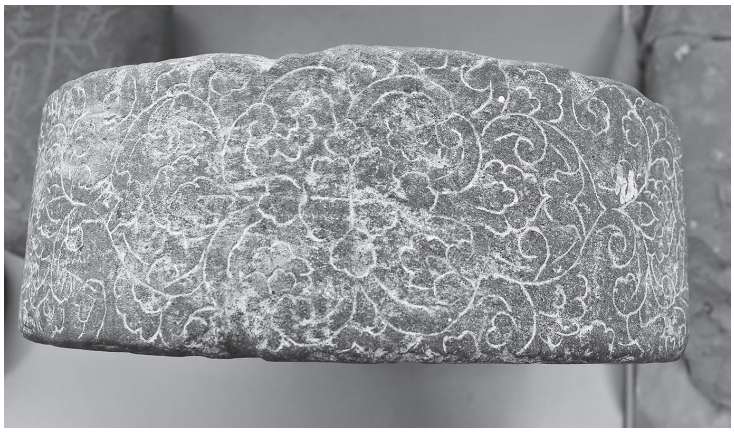


図 1-5. 上面

＜背面（図 1-6）＞

坐像１体を線刻する。火焔文で縁取られた円形頭光の中に小ぶりの肉髻らしき形が見え、如来像と思われる。また膝の背後から唐草文が伸びる。その他は甚だしく摩損して判然としない。

＜制作年代と背景の考察＞

本作例の制作年代については、従来、7-8 世紀（肯加哈买提 2017：227）など、唐砕葉鎮時代とされてきた。筆者も砕葉鎮時代の作とすることには賛同する。しかし先行研究では論証の手続きを踏まず、漢文造像銘を有する本作例が砕葉鎮時代の作であることは自明としているように見受けられる。そこで、本稿では中原における類例との比較検討を通じて、より確実な年代観を示したい。

まず、本作例が初唐様式（618-712）[8] の範疇に入ることは、大方異論がないものと思われる。初唐と盛唐の様式的差異は人体のモデリングに顕著であるが、本作例中尊・脇侍の抑揚が穏やかな身体表現は初唐期の特徴を示す。その他も、本作例の特徴的な要素は７世紀後半に出現しており、確実に盛唐以降に下る要素は認められない。例えば、側面線刻の神将形の甲制や、邪鬼の姿勢に左右で変化をつけることは顕慶３年（658）銘の道徳寺碑（西安碑林博物館）（挿図１）等、７世紀半ば以降に出現する[9]。正面龕外の側面と上面に線刻される対葉華文は７世紀後半

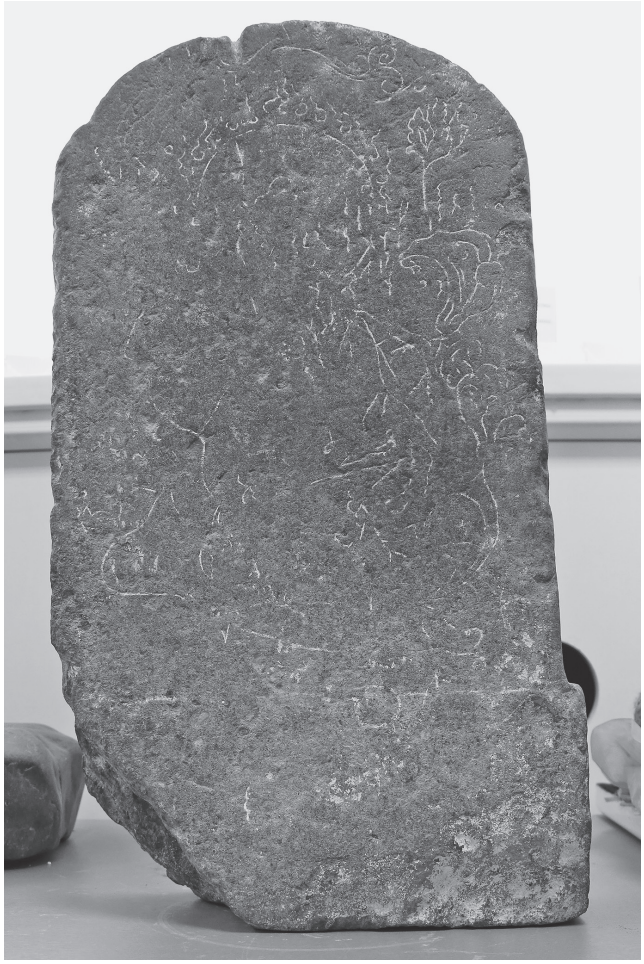


図 1-6. 背面

に成立した文様で敦煌壁画においては貞観後期から開元前期に類例が見出され[10]、正面龕外のパルメット唐草文に見られる葉裏を意識した造形感覚も同時期のものである（中野 1976）。

龕の中心をなす同根連枝蓮華座上の三尊像の図像は初唐期に類例が多く、各地で展開して様々なヴァリエーションがある。次にこの図像の展開を追い、本作例の位置付けを試みたい。

まず長安においては、大雁塔（慈恩寺）附近で出土し、670年代までに制作されたと考えられている一連の「大唐善業泥」銘塼仏の中に、同根多枝蓮華座上の仏菩薩三尊像と小坐仏を表わす類型が見られる（挿図２）。また長安３・４年（703・4）武則天に近しい人々によって造立された宝慶寺石仏群のうち１件に同根連枝蓮華座が採用されている（挿図３）。ただし「大唐善業泥」塼仏と宝慶寺石仏のいずれも、中尊が偏袒右肩の触地印像である点は本作例と異なる。

ところで、初唐期における偏袒右肩の触地印像の流行は、大雁塔附近から複数出土している「印度佛像」銘塼仏を嚆矢とする。「印度佛像」銘塼仏は、おそらく玄奘がインドから請来した塼仏を手本とし、650～70年代に大量に制作された。上述の「大唐善業泥」銘塼仏はこの「印度佛像」銘塼仏から展開したヴァリアントで、インドでグプタ朝を中心に流行した「千仏化現」の図像を採り入れ中国で若干の改変を加えたものと推測されている（荻原 2002、肥田 2011：55-90）。両種の塼仏に共通して、中尊は膝前が斜め上からの視点で表わされ、両足裏を見せて結跏趺坐し、胸を張り腰が絞られた如何にもインド的な像容を見せる。これに比べ宝慶寺石仏の様式は格段に中国化しているが、中尊の形式は塼仏の図像を忠実に踏襲している。初唐期長安造像は基準作例に恵まれず、その欠落を勘案する必要はあるものの[11]、「大唐善業泥」塼仏と宝慶寺石仏はいずれも長安仏教界の中枢で制作された重要作例であり、その両者の表現に連続性が認められることは注意される。

このようなインド伝来の図像に依拠した長安造像と比較すると、本作例（スラヴ大博像）の中尊は中国的な着衣形式をとり、印相も前代から一般に見られる形式である。要するに保守的で異国的情趣が薄められており、長安の同根連枝蓮華座の作例とは一線を画すといえよう。本作例はむしろ、龍門石窟をはじめとする洛陽地域の作例に近い。龍門の紀年銘を伴う同根連枝蓮華座の作例については姚瑶 2014 が詳しく検討しており、以下適宜参照しながら見ていきたい。

洛陽周辺で同根連枝蓮華座が最初に出現したのは鞏県石窟で、龍朔年間（661～663）の紀年銘をもつ阿弥陀三尊龕３件がある。３件とも中尊は大衣を偏袒右肩にまとい、僧祇支をつけ、右手を胸前に挙げる。龍朔３年の第124龕では左手を膝上に伏せ置いており、中尊が本作例と同じ着衣形式・印相をとる（図13）。しかし脇侍菩薩の姿勢が固くほぼ直立する点は本作例と異なり、形式・様式の両面で本作例に最も近いのは、鞏県に遅れて出現した龍門石窟の諸作例である。

龍門では、上元２年（675）に完工した勅願窟・奉先寺洞の中尊（＝奉先寺大仏）頭光内に穿たれた小龕に同根連枝蓮華座（姚氏は同茎蓮華座とよぶ）上の三尊像が表わされている（挿図５）。この他、同根連枝蓮華座の作例で銘文中に年紀と阿弥陀・釈

挿図 1-1. 七尊像全体

挿図 1-2. 部分（右天王）

挿図 1-3. 部分（左天王）

挿図 1. 道徳寺碑 唐・顕慶 3 年（658） 西安碑林博物館

挿図 2.「大唐善業泥」銘塼仏　唐　故宮博物院

挿図 3. 三尊仏龕（宝慶寺石仏）　唐
東京国立博物館（TC-721）

挿図 4. 鞏県石窟第 124 龕　唐・龍朔 3 年（663）

挿図 5. 龍門石窟奉先寺洞中尊頭光内小龕　唐

挿図 6. 龍門石窟万仏洞（第 543 窟）甬道 N7 龕
唐・垂拱２年（686）

挿図 7. 骨二娘造阿弥陀・観音・大世志（勢至）像龕
唐・神龍元年（705）　洛陽博物館

迦の尊名が記されるものを抽出すると、やはり上元２年銘が最も早く、以後690年代まで17件を数える。[12] その中の10件は万仏洞（第543窟）内にあり、さらにその中で９件の年代が永隆年間（680-81）に集中している。中尊の着衣形式・印相を見ていくと、袈裟を通肩につけるものが11件、触地印像も11件で最も多い。本作例と同様、偏袒右肩＋僧祇支の着衣形式と右手を胸前に挙げる印相[13]の組み合わせ（挿図６）は 17 件中３件（永隆２（681）～天授２（691）年と少数であるが、[14] 先述の奉先寺大仏頭光内小龕の中尊が同じ着衣形式・印相を示すことは注目されよう。

以上の如く、本作例に形式・様式の上で最も近い類例が奉先寺洞以後 690 年代初頭までの龍門紀年銘作例に見出せることから、本作例はこの時期の龍門／洛陽造像の流れを汲むものと位置づけられる（ただし後述するように制作地は砕葉現地と見られ、洛陽を拠点とする工人が砕葉に至ったのであろう）。次に、龍門において類例が出現した背景について考察したい。

初唐期の龍門において国家的大事業である奉先寺洞の造営が画期をなすことは、夙に諸先学が指摘するところである。中尊台座の「大廬舎那像龕記」には奉先寺洞が高宗の勅願で、武后が自らの脂粉銭二万貫を以て助成し、長安実際寺の善導と法界寺恵簡を検校僧とすることが記される他、宮殿造営等の土木工事を所掌する司農寺系の官吏・匠の名が列挙されている（肥田 2007）。奉先寺洞造営を長安仏教界・官吏が主導し、その下で長安の工人が動員されたことが読み取れる。岡田1991は、奉先寺洞の造営期間中に龍門の紀年銘作例が激減していることから、当時龍門で活動していた工人の大部分が奉先寺洞造営に投入されたと推測する。そして長安の工人と洛陽（龍門）の工人が力を合わせて奉先寺洞造営という大事業にあたった結果、龍門ではそれ以前の様式展開が緩慢で保守的であった状況から一変し、龍門造像は「長安様式と肩を並べ、そして初唐の仏像様式を代表する立場を得ていく」と総括する。

以上をまとめると、中尊が本作例と同形式を備える同根連枝蓮華座の作例は660年代前半からおそらく洛陽を中心に一定範囲に流布していたが、龍門では670年代に奉先寺洞造営を契機としてこの形式が取入れられた。奉先寺大仏という重要作品の頭上に出現していることは、この形式が当時一定の影響力をもっていたことを示すといえよう。その後、同根

連枝蓮華座の作例は増加するが、多くの場合、中尊は通肩・触地印像である。同根連枝蓮華座の作例に限らず、龍門では奉先寺洞造営の前後で仏像の着衣形式が偏袒右肩＋僧祇支を含む双領下垂式から通肩へ、印相は施無畏印から触地印へ推移していくことが指摘されている（姚 2014、久野 2011: 309-353）。すなわち、龍門石窟の文脈において、本作例のような形式は奉先寺洞造営期を挟む新旧の要素が共存したものと理解される。

ここまで同根連枝蓮華座上の中尊の着衣形式・印相に着目して、本作例と龍門の作例の類似を論じてきた。しかし、本作例には龍門の類例と一致しない要素もある。

その一つは側面線刻の神将形の図像である。罕見の限り、龍門には本作例と邪鬼の表現まで一致する作例は見出せない。先述の如く、本作例の神将像は顕慶３年（658）銘の長安・道徳寺碑との類似が顕著で、この系統の図像を模したものと見られる。ただし、本作例では右方像が左方像と同じ姿勢・持物で表わされ、左右の神将像が対称の姿勢をとらないことは道徳寺碑と異なる。また道徳寺碑では左方の神将像の姿勢とこれを載せる邪鬼の姿勢が連動しているのに対し、本作例では邪鬼が逆向きにされた結果神将像の足がうまく収まらず、不合理な表現になっている。粉本の転写に伴う反転・写し崩れであろう。

腰を大きく振って邪鬼の上で片足を踏み上げる神将像はまず長安で出現し、奉先寺洞造営期に龍門に流入した（岡田 1991）。道徳寺碑系の神将像の粉本も同様に、670年代に長安から洛陽に齎された可能性がある。この図像が本作例側面の線刻画に採用され、龍門石窟で採用されなかったのは、単独龕像と石窟造像の差異とも説明できる。

もう一点、本作例が龍門の類例と異なるのは、蓮茎の表現である。龍門の同根連枝蓮華座は本作例より明らかに蓮茎が太く、ほぼ龕床に横たわるように伸びて重量感のある表現が定型化している。また龍門では先が旋回する側芽を表わさないか、あっても目立たない例が多い。蓮茎が太いことは、偃師で発見された神龍元年（705）銘阿弥陀・観音・大世志（勢至）像龕（挿図７）も同様である。強いて言えば、鞏県龍朔年間の作例の蓮茎が比較的細く上下に動きがあり、先が旋回する側芽が表わされるなど、洛陽周辺作の中では本作例に比較的近いが、これに比べても本作例の表現はより平面性への指向が強く絵画的である。この点を如何に解釈すべきか鉄案がなく、後考を待ちたい。

2-2. 五尊龕断片（図２）

＜概要＞

アク・ベシム遺跡で1987年偶然に発見されたというが、発見時の詳細は不明である。

石造龕の中央から左下にかけての断片で、縁を残して彫り窪めた龕内に中尊如来坐像、その左右に比丘立像・菩薩立像の計五尊と、下部に一対の獅子を浮彫していたと見られるが、龕右側から上部、基部を大きく失う。中尊の頭部が欠失するのは、人為的に打ち欠かれたためであろう。また各所で、石の表面が剥離している。

中尊如来像は蓮華座上に趺坐（両足衣中）する。右手は胸前に挙げ、手先を欠失するが、掌をやや内側に傾けていたようである。左手は膝上に伏せ、第四・五指を欠損するが、五指を下向きに伸べていたことが見てとれる。大衣をくつろげて偏袒右肩にまとい、偏衫と僧祇支をつける。大衣の縁は左肩部分で大きく折り返され、衣端が右膝から左手首上にわたることが目立つ。プロポーションは肩幅が広く、胴体はブロック状で膝張も大きいのに対し、頭部がアンバランスなまでに小さい。頭光は縦楕円形を線刻し、内側に頭頂から斜め下にかけて並行二本線を刻むことは珍しい。蓮華座は、二重仰蓮と一重反花からなり、その下部から茎が左右に向けてＵ字を描くように発し、途中で二本に分岐してそれぞれ比丘と菩薩の蓮華座に繋がる。

比丘像（左）は頭部から左肩が欠損する。半球状を呈する蓮華座上に両足を揃えて直立する。内衣の上に袈裟を偏袒右肩にまとい、右手は胸前で衣端を握るようである。

菩薩像（左）は膝より上が欠損する。やや斜めを向き、半球状を呈する蓮華座上に足を軽く開いて直立する。裳裾正面に帯状装飾が垂下し、蓮華座に長く懸かる。蓮華座の左側面にも同様の帯状装飾の先端が残存する。

台座下中央に蓮弁装飾をほどこした脚台付きの香炉（もしくは球状合子）を表わし、その左右に一対の獅子を配する。左方の獅子は、左前脚を立て、右前脚を伸ばして球にのせ、両後脚を曲げて坐り、尾を垂直に立てる。右方の獅子は前脚のみ残して欠失

図 2-1. 正面全体

図 2-2. 部分（獅子）

図 2. 五尊龕断片

する。

龕下縁に線を刻み、帯状区画に文様を線刻するようにも見えるが摩耗して判然としない。基座中央に題記があった可能性もあるが、全体に表面が損傷して確認できない。側面･背面は装飾をほどこさない。

＜考察＞

本作例も初唐期中原造像を参照していると見られるが[15]、先の三尊龕が標準的な初唐中原様式を示すのとは対照的に、逸脱的な表現が目立つ。例えば蓮華座は同根連枝の表現を意図しているようだが、蓮茎は下から上に伸びるのではなく、中尊蓮華座の下部から左右に発している。これは蓮華座下に香炉と獅子を配したため蓮茎を表すスペースを確保できない故の処理とも解せるが、そもそも同根連枝の表現は一面に広がる蓮池から伸び出ることを前提としており、香炉や獅子と組み合わせることは稀である。また三尊・五尊像の場合、通例では比丘や脇侍の肩と頭部の位置が中尊より低くなるよう配置するが、本作例では獅子像がアンバランスに大きいためか比丘像と中尊は蓮華座･肩の位置が横並びになっている。このような逸脱的表現は、工人が図像の意味や唐代仏教美術の規範に通じていないことを露呈するものである。

本作例の工人の系統を考える上で、獅子像の造形は示唆的である。側面観で鼻梁が盛り上がること、たてがみの頬の生え際を短く表現すること、前脚の後ろ側にふさふさとした毛を意匠化することは、ササン美術における獅子像と共通する（挿図８）。よって、イラン系の文化的背景に属する工人が制作に関与していた可能性を指摘したい。

2-3. その他

その他の作品はあまりに断片的で、様式・図像的考察を行うために充分な情報が得られず、幾つか気づいた点を簡単に述べるにとどめる。

石造龕断片③・④（図３．４）はベルンシュタム寺院から出土しており、相互に接続はしないが同一龕に属する可能性が指摘されている。③の左脇侍菩薩は頭頂に髻を結い、梳き上げた毛筋を線状に表わす。円形の耳璫をつけ、左肩から条帛をつける。④の獅子像は、既に指摘されているように②五尊龕獅子像に近似しており（肯加哈买提 2017: 226-227）、何らかの影響関係があったことが窺われる。

単独像①着袈裟立像[16]二断片（図５）は、2000年前後にブラナ博物館員によってブラナ防壁東方 1.5 ㎞の地点で発見されたという[17]。本来はおそらく 2m を超える高さの像に属し、断片 A は右肘から背面、断片 B は膝裏から台座（仰蓮・反花）の部分である。いずれも前面が大きく削がれるように欠損することは惜しまれるが、断片 B の右足首の辺りが辛うじて残存し、像の奥行は現状と大きく変わらず平面的な造形であったことがわかる[18]。袈裟を通肩に着け右手を挙げ（断片 A）、裙が長く背面では足が見えない（断片 B）。衣紋線はまばらで紐状に彫出する。平面的な造形が強調される。裾が長い着衣形式などから見て、本像は中国仏教文化圏の造像伝統に連なるものであろう。

本稿で石造仏塔頂部（図９）と呼ぶ作例は従来柱頭とされてきたが、おそらくインド式ストゥーパにおいて覆鉢の上に重ねられた平頭（ハルミカー）が伝播の過程で変形したもので、上部枘穴に別材の相輪を立てていたと推測される。平頭の上縁に山形の装飾をめぐらせることは、ガンダーラのストゥーパにおける鋸歯形装飾と類似する（挿図９）。頂部の半球形の盛り上がりは中国北朝期の作例に多く見られ、中国式楼閣とインド式ストゥーパが結合して方形仏塔の上部に覆鉢を表わしたものと解釈されている[19]。しかし中国北朝期の作例においては平頭の四隅にアカンサス葉か城壁文を立てることが定型化しており、本作例と一致するものを見出せなかった。仏塔の上部構造の展開については不明の部分が多く、今後の課題としたい。

Ⅲ．制作地

石造仏教彫刻は通例、現地産の石材を用いて現地で制作されており、本稿が扱う諸作例もその例外ではないことが予期される[20]。石質について、三尊龕は花崗岩と報告されている（加藤 2017）。五尊龕については、帝京大学文化財研究所の金井拓人氏に高精細画像から岩石種の判定を依頼し、砂岩との回答を得た[21]。

アク・ベシム周辺山地は堆積岩、火山岩、花崗岩類から構成されるといい（河西 2019）、三尊龕・五尊龕の材質と矛盾しない。今後作品自体の科学的分析を行うことが望ましいが、現段階では、一連の石造仏教彫刻は現地産の石材を用いて現地で制作されたものと考える。

Ⅳ．砕葉鎮における石造仏教彫刻制作の意義

ここでは前章までの考察を振り返りつつ、一連の石造彫刻の制作背景について考えたい。

三尊龕については670年代の奉先寺大仏造営期に形成された洛陽様式を反映していると結論した。ただ現地で制作されたと見られるため、三尊龕の作者は 670 年代を大きく降らない時期に洛陽周辺から砕葉地域に至り、本作例を制作したことになる。なお、文献学的研究から、砕葉鎮を唐朝が直接統治したことが確実な期間は679～686年・692～703年の計25年間であることが明らかにされている（齋藤 2016、柿沼 2019）。三尊龕の制作時期もこの範囲内であることが推定される。さらに年代幅を狭めるならば、先述の通り本作例中尊のような衣制・印相は龍門石窟において680年代以降は下火になっており、同根連枝蓮華座を表わす紀年銘作例では天授２年（691）を下限とすることから、679～686年の可能性がより高い。安西副都護・杜懐宝が小型の石造仏教彫刻（アク・ベシム遺跡内で偶然に発見された一仏二菩薩の三尊像[22]、いわゆる「杜懐宝碑」）を造立したのもまさしくこの時期であることが想起される[23]。すなわち、本作例は「杜懐宝碑」と並んで唐・砕葉鎮時代前期に位置付けられ、像を失い題記のみ残る「杜懐宝碑」と、題記を多く失い像が残る本作例は、相補関係にある作例として扱うことが可能であろう。

『新唐書』巻111王方翼伝等の史料によると調露元年（679）９月頃から、安西都護・王方翼は50日余

挿図 8-1. 全体

挿図 8-2. 部分（獅子）

挿図 8. 帝王獅子狩文皿　鍍金銀造　ササン朝　5 世紀　Miho Museum

図 3. 龕断片（左脇侍）

図 4. 龕断片（獅子）

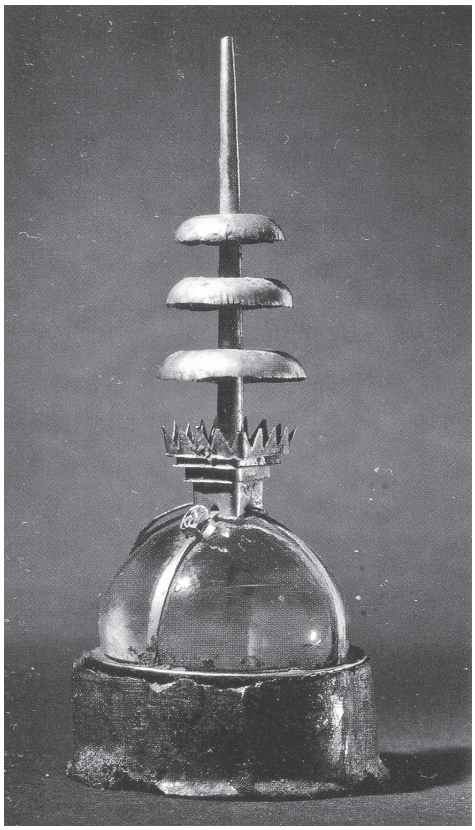
図 5-1. 上

図 5-2. 下

図 5. 着袈裟像断片

図 9. 仏塔上部

図 6. 如来像頭部断片



挿図 9. ストゥーパ型舎利容器　金・水晶
ガンダーラ　個人蔵

図 8. 右手断片

図 7. 蓮華座断片　（2 片）

りで砕葉城を築いたという。帝京大学によるアク・ベシム発掘調査では、文献に記される唐朝の土木工事・建築活動を跡付けるような発見が相継いだ。とりわけ、第二シャフリスタンで「□懐」字刻書瓦を含む厖大な瓦が発見されたことは興味深い。これら出土瓦の文様・製作技法が唐大明宮の出土瓦と類似することから、中央技術者が砕葉鎮に直接派遣され現地で造瓦に従事した可能性が指摘されている（山内他 2018：149-157）。また瓦葺建築に必須の柱礎石も発見されているが（山内他 2019：口絵 6-16）、これも現地産の石材を使用したと見られる。西陲の鎮・砕葉にわざわざ中国式瓦葺建築を造営したのは、夷夏に唐朝の威光を示すためであろう（山内他 2018：156）。またブラナ博物館所蔵の碑首（加藤 1997：図 6-17）のような石碑も砕葉鎮時代の制作と推測される。

想像を逞しくすれば、三尊龕の作者は、奉先寺洞造営を契機として司農寺系の中央機構と結びつきを強めた洛陽の工人で、土木専門の工人と共に砕葉に派遣されたのではなかろうか。石造仏教彫刻は唐の砕葉進出と軌を一にして当地に波及し、ベルンシュタム寺院等、唐系統の仏教寺院／コミュニティにおいて制作・供養されたのであろう。ただし、現存作例の中で初唐期中原の標準的様式を示すのは三尊龕のみで、五尊龕をはじめとする他の作例は逸脱的表現が見られることから、砕葉において活動した石彫専門の工人のうち中原で訓練を積んだ者は少数で、活動時期も限られていたことが窺える。

おわりに

本稿では、クラスナヤ・レーチカ発見と伝える石造三尊龕に紙幅を大きく割いた。針小棒大の誹りを免れないが、砕葉に関する文献・造形史料とも極めて限られた中、本稿が微少なりとも寄与するところがあれば幸いである。

最後になるが、三尊龕や「杜懐宝碑」の造立・供養にあたっての導師として、唐内地から派遣された僧や、その僧が住持する寺の存在も想定されよう。従来、砕葉における唐系統の寺院としては史料に名の残る大雲寺を中心に議論されてきたが、大雲寺設置（砕葉鎮においては長寿元年（692））以前から唐朝は一州一寺制を施行しており、調露元年（679）の築城後まもない砕葉鎮に漢僧が住持する官寺が設けられていた可能性も考慮されるのではないだろうか。また砕葉における唐系統の寺院と、中央アジア系寺院との先後関係も様々な学問分野から再検討がのぞまれる。疑問は尽きないが、今後の発掘調査の進展に期待を寄せつつ筆を置きたい。

註

1）これらの作例に関する文献について、筆者の浅学によりロシア語報告は参照することを得ず、和文（林 1996、加藤 1997、ケンジェアフメド 2009、川崎・山内 2020）・中文（肯加哈买提 2017）・英文（Stavisky 1993/94）を参照した。

2）発掘地点番号については、山内他 2019（197）を参照。

3）なおアク・ベシム遺跡には第０～２の三箇所の寺院の他に、仏教寺院址と推定されている Object X がある（Vedutova & Kurimoto 2014）。

4）2010年から発掘中のクラスナヤ・レーチカ第３仏教寺院は、キルギス国立歴史博物館の展示によると、方形プランの祠堂の正壁・側壁に凹字型の像台がめぐらされ、正壁中央に塑造坐像が安置されていた。

5）発見時の状況は、現地考古局も不明とする。なお、帝京大学文化財研究所の山内教授より、本作例の背面中央はやや凹むように摩耗しており、研石として二次利用された可能性をご教示いただいた。以上を踏まえると、本作例がクラスナヤ・レーチカ第二寺院に属するものか確実ではなく、本稿では遊離資料として扱う。

6）中尊の胸下が不自然に凹むこと、左脇侍の右肩から肘までが不釣り合いに短いことが目につくが、おそらく制作中に石材が欠けたためで、補刻によるものではない。

7）本来尾を隠す姿勢であったか、脚と脇の間から前面に出すなどの粉本を表現しきれず省略した可能性の他、背後の線刻が当初からとすると立てた尾の輪郭にも見え、立体に彫り忘れるなどした可能性もある。

8）美術史上の初唐・盛唐の画期を680年代におく見方もあるが、本稿は初唐を建国から睿宗の太極年間（712年）までとする伝統的な四唐区分を採る。

9）大島幸代氏（香雪美術館学芸員）のご教示による。ここに感謝申し上げます。

10）薄 1990：図 3-32（敦煌莫高窟第123窟）など。

11）そのような試みを行っている最新の論考として、藤岡 2019 が挙げられる。

12）清明寺洞（第557窟）甬道 N9 号龕（姚 2014：152-155）。

13）姚2014では説法印と表記するが、図版を見る限り小稿で施無畏印とする印相に相当する。

14）永隆２年（681）銘の万仏洞（第 543 窟）前庭 S15 龕、垂拱２年（686）銘の同窟甬道 N7 龕、天授２年（691）年銘の双窯北洞（第521窟）前庭 S15 龕（姚 2014：表５）。

15）膝前から左手首にかかる大衣の表現や印相は、三尊龕より早い時期の図像を参照していると思われる。

16）単独の大型石像であることから如来像の蓋然性が高いが、比丘形の可能性も完全には排除できず、仮に着袈裟像と呼ぶ。

17）キルギス共和国科学アカデミーのバキット・アマンバエヴァ氏のご教示による。

18）現地調査時は時間的制約と収蔵庫内の状況により前面の撮影を行うことができなかった。計測にあたっては吉田豊氏（当時京都大学文学研究科教授）に助けていただいた。ここに感謝申し上げます。

19）中国北朝ではこのような表現は雲崗石窟の浮彫や、造像塔などに見られる。実際の建築の例として、トルファン・トユク石窟の古写真に、日干し煉瓦造方形仏塔頂部の覆鉢型を確認できる（S. F. Oldenburg 1914, PL. XLIX）。

20）チュー川流域における例外として、ノヴァ・パクロフカ遺跡発見のガンダーラ製ストゥーパ基壇部浮彫断片がある（Stavisky1993/94: 121, PL. VII 等）。現存最大幅6cm 程度、完形でもおそらく掌にのる程のミニチュアサイズながら、極めて精巧な彫りである。持ち運びを前提に制作されたものであろう。

21）ご教示に感謝申し上げます。また筆者の非学により、ご教示いただいた内容を充分に活かすことができなかったことをお詫び申し上げます。

22）銘文が「一仏一菩薩」に読めるとして三尊像であることを疑う向きもあるが（柿沼 2019：53）、わずかながら三尊の台座の下端が残存し、中尊台座框は六角、両脇侍台座は摩耗するがほぼ円形を呈することが確認できる。よって唐式の一仏二菩薩であったことは問題ない。

23）銘文における杜懐宝の役職名「碎葉鎮圧十姓氏」の解釈をめぐって年代に関する意見も別れるが、680～686 年の間であることは確実視されている（齋藤 2016: 87-89）。

参考文献

和文（五十音順）

岩井俊平　2019「中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集　79-97頁

岡田健　1988「長安初唐造像の展望」『佛教藝術』177号　61-74頁

岡田健　1991「龍門石窟初唐造像論――その三　高宗後期――」『佛教藝術』

柿沼陽平　2019「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集　43-59頁

加藤九祚　1997「第６章　セミレチエの仏教遺跡」『シルクロード学研究４　中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究センター　121-184頁

河南省文物研究所 1983『中国石窟　鞏県石窟寺』平凡社・文物出版社

川崎建三・山内和也　2020「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡第２シャフリスタンの発掘調査――1939年、1940年――」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集　1-31頁

河西学　2019「キルギス共和国アク・ベシム遺跡出土土器胎土の岩石鉱物組成」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集　117-122頁

久野美樹　2011『唐代龍門石窟の研究――造形の思想的背景について――』中央公論美術出版

齋藤茂雄　2016「砕葉とアク・ベシム―７世紀から８世紀前半における天山西部の歴史的展開」キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所　『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡― 2011～2014年度』81-92頁

曾布川寛　1988「龍門石窟における唐代造像の研究」『東方学報』60号　199-397頁

東京国立博物館・NHK・NHK プロモーション　1998『宮廷の栄華　唐の女帝・則天武后とその時代展』 NHK、NHK プロモーション

百橋明穂・中野徹　1997『世界美術大全集　東洋編　第４巻　隋・唐』小学館

内藤みどり　1997「アクベシム発見の杜懐宝碑について」加藤1997　151-158頁

中野徹　1976「唐草文の流れ」『隋唐の美術』大阪市立美術館　263-253頁

ヌルラン・ケンジェアフメド　2009「スヤブ考古―唐代東西文化交流―」窪田順平・承志・井上充幸『イリ河流域歴史地理論集―ユーラシア深奥部からの眺め』松香堂　217-301頁

萩原哉　2002「玄奘発願「十倶胝像」考――「善業泥」塼仏をめぐって」『佛教藝術』261号　80-100頁

林俊雄　1996「天山北麓の仏教遺跡」『ダルヴェルジンテパ DT25　1989～1993発掘調査報告』創価大学シルクロード学研究センター

肥田路美　2007「龍門奉先寺洞廬舎那仏像」『佛教藝術』295号　59-73頁（再録：肥田 2011）

肥田路美　2011『初唐仏教美術の研究』中央公論美術出版

藤岡穣　2019「初唐期における長安造像の復原的考察」肥田路美 責任編集『アジア仏教美術論集 東アジアⅡ 隋･唐』中央公論美術出版　65-105頁

山内和也・櫛原功一・望月秀和　2018「2017年度アク・ベシム遺跡調査報告」『帝京大学文化財研究所研究報告』第17集　121-168頁

山内和也・バキット アマンバエヴァ・櫛原功一・望月秀和・中山千恵・大谷育恵・平野修　2019「2018年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集　131-203頁

姚瑶　2014「初唐期の龍門石窟に見られる同茎蓮華座に関する研究」『中国考古学』第14号　141-163頁

龍門文物保管所・北京大学考古系 1987 『中国石窟　龍門石窟』第二巻　平凡社・文物出版社

中文

薄小瑩　1990「敦煌莫高窟六世紀末至九世紀中葉的装飾図案」『敦煌吐魯番文献研究論集』第５集 北京大学出版社
肯加哈买提 , 怒尔兰 .　2017『碎叶』上海古籍出版社

欧文

Bernshtam, A.H. (ed.) 1950　Труды семиреченской археологической експедиции “Чуйская долина”, Материалы и исследавания по археологии СССР, no. 14, Издательство Академии Наук СССР, Москва-Ленинград.

Jongeward, David., Errington, Elizabeth., Salomon, Richard., Baum, Stefan. 2012　Gandharan Buddhist Reliquaries, University of Washington Press.

Oldenburg, S. F. 1914　усская туркестанская экспедиція 1909-1910 года, Изданіе императорской академіи наукъ, pp. 37-40. 邦訳・複製：加藤九祚 1999『ロシア第一次東トルキスタン調査団報告 1909-1910』オリデンブルグ刊行会

Stavisky, Boris. J. 1993/94　The Fate of Buddhism in Middle Asia: In the Light of Archaeological Data, Silk Road Art and Archaeology, 3, pp. 113-142.

Vedutova, L.M. and Kurimoto, Shinichiro. 2014　Paradigm of Early Middle Age Turkic Culture: Ak-Beshim Settlement, Institute of History and Cultural Heritage National Academy of Science of the Kyrgyz Republic, Bishkek.

図版出典

図1-9　筆者撮影
挿図１　大島幸代氏提供
挿図２　肥田 2011：図31
挿図３　百橋・中野 1997：挿図123
挿図４　河南省文物研究所 1983：図232
挿図５　姚 2014：図２
挿図６　龍門文物保管所他 1987：図80
挿図７　東京国立博物館他 1998：No.14
挿図８　MIHO MUSEUM HP（http://www.miho.or.jp/booth/html/artcon/00000489e.htm）
図９　Jongeward et al. 2012: Fig. 3.36a

後記

本稿は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団2018年度助成による「キルギス・チュー川流域出土仏教彫塑の調査研究―砕葉鎮時代を中心に―」の一環である。現地調査は2018年８月27～30日に実施した。また内容の一部は、下記の口頭発表に基づく。「アク・ベシム周辺出土の唐風仏教彫刻～石彫を中心に～」（日中平和友好条約締結40周年記念事業　国際研究集会「文化が紡ぐ道」、於東京藝術大学、2018年12月14日）。

現地調査の際は、キルギス共和国科学アカデミーのバキット・アマンバエヴァ氏、帝京大学文化財研究所山内和也教授はじめ調査隊各位にご高配を賜った。ここに感謝申し上げます。